

自己申請課題報告書概要

「メモに基づくスピーキング指導」が「即興力」育成に及ぼす効果の検証

吉澤孝幸（博士前期課程 2023 年 3 月修了）

本研究は、「話すこと」における即興力を育成するための手段として用いたメモ式スピーキングの有効性を検証することを目的とした実践研究である。

平成 29 年告示の中学新学習指導要領の大きな柱の一つが、「即興力の育成」である。しかし、中学生にとって限られた時間で考えを構成して伝えることは簡単なことではない。そのことを踏まえ、その橋渡しとしてキーワードのみで構成されたメモに基づいて話す内容を組み立て話す活動を取り入れその効果を検証した。

一つ目の検証（Study 1）における被験者は、実験群が 2021 年の中学 3 年生 72 名と 2020 年の中学 3 年生 72 名である。実験群は、メモ式スピーキングを中 2 から中 3 にかけて経験した学年の生徒であり、統制群は全くメモ式スピーキングを経験していない学年の生徒である。これらの被験者を対象に、GTEC スピーキングテストにおいて、中 2 から中 3 にかけての伸びをそれぞれ対応のない t 検定で検証した。その結果、1 年間でのスコアの伸びは、実験群が 18.3 ポイント、統制群が 6.9 ポイントとなりそれぞれのスコアの伸びにおいて有意な違いが見られた。

二つ目の検証（Study 2）対象は、今年度（2022 年度）の中 2（24 名）と中 3（25 名）であり、6 月から 10 月までの間に実施した 3 回の校内スピーキングテストにおける評価点の変化を比較した。また、スピーキングテストにおいて各生徒が作成したメモを授業での指導を反映したメモであるかどうかを基準に 4 つの類型に分類し、メモのタイプと発話の評価点との関係を検証した。その結果、6 月に行われたスピーキングテストでは相関が弱く、7 月から中程度の相関が見られ、10 月には強い相関が見られた。また、スピーキングテストの評価自体も 3 回のテストの間に有意な差が見られ、時間経過と共に効果が観察された。このことから、効果が表れる時期については、1 か月では不十分で、3 か月から 4 か月必要であることが判明した。また、このメモ式スピーキングを導入することで、全くの即興スピーチの評価についても事前、事後の伸びに有意な差がみられた。

これらのことから、メモ式スピーキング指導を導入する際には、その方法と期待される成果を生徒と十分共有して指導していくことが大切であることが分かった。また、本研究の後に行った生徒の感想からも、「文を書いて覚えてから話すよりも、より多様な表現がその都度口から出てくる。頭で文を組み立てる速さが向上する」というコメントが見られ、全ての生徒が成果を実感して、方法論の有用性を認識していることが分かった。課題としては、校内スピーキングテストの判定基準を GTEC の評価基準を参考に独自に作成したが、成果を検討するためには、より客観的な妥当性を保証した上で判定できるように今後改良していくことが必要であると考えている。また、生徒の産出した発話を段階的な評価基準で判定はしているものの、発話に対して言語的な観点からの分析が行われていないことが課題であると認識している。特に、キーワードとして書き出した語が実際に使われているかという概念化と発話の関係性やキーワードとして書き出した語がどのような語と連結されて文を組み立てられたかという点にも分析を加える必要がある。今後の研究の方向性としては、書き出したキーワードと結び付けられた語のデータを収集し、教室における学習者コーパスの観点からも分析を深めていきたいと考えている。